

フランス・ルネサンスにおける学問の啓蒙化

——ギ・ド・ブルエスの

『新アカデミー会員に反駁する対話』について——

L'enseignement des disciplines dans la Renaissance française:

Le cas des *Dialogues contre les nouveaux Academiciens*

de Guy de Bruès

小池美穂

要 旨

16世紀半ば、懐疑主義運動が盛んになるなか、ギ・ド・ブルエスは『新アカデミー会員に反駁する対話』（1557）を上梓する。法律家で哲学者でもあったブルエスは、この作品を対話という形式で書き、当時実在したプレイヤッド派の詩人たちを登場させ、様々な事柄について討論させている。題名が示している通り、懐疑主義に対する反論として提起されているが、同時に懐疑主義者の立場を支持している作品であるといえる。フランスにおいては、特に16世紀頃から、技術が発達し始め、伝統的な知識に疑いをもつ学者たちが現れる。この書物は時代的なものであるといえるが、それではどの点に関して独創的であるといえるのか？本研究では、「懐疑主義」という概念に焦点を当てるのではなく、学問史の領域から分析することで、この『新アカデミー会員に反駁する対話』の新たな側面を明るみに出そうと試みる。

キーワード

懐疑主義, 学問史, 光学, 啓蒙書, ギヨーム・キャヴェラ

ギ・ド・ブルエスは1557年に、3部構成の『新アカデミー会員に反駁する対話』を上梓した。この書物は対話篇で書かれ、当時実際に活躍していたバイフ（Jean-Antoine de Baïf, 1532-1589, プレイヤッド派の詩人）、ロンサール

(Pierre de Ronsard, 1524-1585, プレイヤッド派の詩人), ニコ (Jean Nicot, 1530頃 - 1604, リスボンでフランス大使を務めた知識人), そしてオベール (Jacques Aubert, 1500頃 - 1587, 医者) の4人が登場し, 討論する。第1部では, 法律というのは真実の基準になりうるのか, そして当時の魂の問題や学問に関する議論が展開されている。第2部で, 善と悪をどのように考えるのか, 第3部で, 法律の重要性を述べている。題名が示している通り, 懐疑主義に対する反論として提起されているが, 同時に懐疑主義者の立場を支持している作品であるともいえる。ブルエスの作品に関する研究は数少ないが, そのなかで, 16世紀の「懐疑主義」という主題のもとでブルエスの作品が取り扱われている。この懐疑主義を「主題」にした研究としては, パノスの研究¹⁾とグリーンウッドの研究²⁾だけが残っている。またピエール・ヴィレ³⁾とポプキン⁴⁾もブルエスのこの作品について, わずかなコメントを記している。

ブルエスの『新アカデミー会員に反駁する対話』からどれだけモンテーニュがインスピレーションを受け, その後の彼の執筆活動に強い影響を与えたのかをピエール・ヴィレは述べている。また, ブルエスは時代的なものを巧みに描いているとして, モンテーニュに共通している部分が多々あることも示している。しかし, モンテーニュとブルエスの懐疑主義は実際かなり異なり, ブルエスの作品には物足りなさを感じる。ヴィレによると, 『新アカデミー会員に反駁する対話』はモンテーニュの懐疑主義思想に直接影響を与えたというよりも, モンテーニュが自分の考えを準備する際に必要な書物であったと位置付けている⁵⁾。

ポプキンの場合, ギ・ド・ブルエスの懐疑主義思想に関しては様々な意見が存在していることを指摘しているが, 最終的に上記のピエール・ヴィレの言葉を借りて, 「ブルエスは, いわば周囲で感じる不確かさや不安を端的に示し, さらにキケロの『アカデミー派の人々』が彼のその不確かさと

不安を取り除こうと助けている」⁶⁾と述べ、ブルエスの影響は当時の学者たちには限られたものとなったことを説明している⁷⁾。

このように、ギ・ド・ブルエスは、当時の懐疑主義者の一人であり、彼が単に「時の人」であったことをヴィレやポプキンは強調しているが、当時、大手出版社を切り盛りしていたギヨーム・キャヴェラ（15??-1576）が何故ブルエスの書物『新アカデミー会員に反駁する対話』に興味を示したのであるか。しかし、このことについてヴィレもポプキンも何も触れていない。まずこの疑問にこたえる前にギ・ド・ブルエスという人物を紹介し、そして次にギ・ド・ブルエスの懐疑主義思想とはどのようなものであったのかについて述べ、最後に彼の独創性はどこにあるのかを吟味していく。

I. ギ・ド・ブルエスという人物

ギ・ド・ブルエスという著者についてはあまり知られていない。当時人名辞典を作成したラ・クロワ・デュ・メーヌの領主フランソワ・グリユデ（1552-1592）は、彼を「ラングドック生まれのギ・ド・ブルエス」⁸⁾と紹介し、いくつかの対話篇を書いたことと、フランソワ・ラブタン⁹⁾の注釈書の版を見直した人物であることを指摘するだけで、彼の生涯に関する情報はほとんど見当たらない。彼の身分を明かす最もわかりやすい公式の文章が、『新アカデミー会員に反駁する対話』の最後に収めてある「国王による出版允許状」である。そのなかで、下記のようにごく簡単に紹介されている。

我々は、ラングドック州の貴族出である親愛なるギ・ド・ブルエスが、若き日々の大部分を法学の勉強と一緒に哲学の勉強に励んだことを証明し、宣言する。さらに、彼は法学を例証し、そして非の打ち所がないようにするため、法学を本職とする¹⁰⁾。

また、1557年に『新アカデミー会員に反駁する対話』が出版される際、
«ce premier labeur»¹¹⁾「最初の仕事」と明示されているように、1557年代に
活躍し始めたとしている¹²⁾。当時ギ・ド・ブルエスがどれほど有名な人物
であったのかは、彼の交流関係において垣間見ることができる。プレイヤ
ッド派との関係に関しては、多くの研究者がこの関連性に注目している¹³⁾。

さらに、ギ・ド・ブルエスはプレイヤッド派との交流だけではなく、王
立教授団の教授たちとも大変親密な関係であったことが窺える。『新アカデ
ミー会員に反駁する対話』のなかで、ペトルス・ラムスの書物『弁証学』
(1555)を2か所で取り上げ、会話のなかでこの教育者を称賛している。さ
らにパノスによると、ラムスの『弁証学』の詩を仏訳する際にプレイヤ
ッド派の詩人と共にブルエスの名が連なっていることから、ブルエスは1555
年代にはパリにいたことが推定され、ラムスとブルエスとの間には親交関
係があったことを証明している¹⁴⁾。ラムスだけではなく、ラムスの大親友
であり仕事のパートナーとしても知られているオメール・タロンとブルエ
スとの関係までを、パノスは考えている¹⁵⁾。後者は、ピエール・ヴィレも
述べているように、ブルエスの作品においてキケロの影響が強いとされて
いる。特に『アカデミー派の人々』の作品をよく読んでいたブルエスであ
るが、この作品はオメール・タロンによる注釈書(1548)に頼っていると
され、ブルエスはラムスの知的サークルをよく知っていた人物であった。

II. 『新アカデミー会員に反駁する対話』におけるブルエスの目的

1. 献辞と序文を通して

この書物には、ローレーヌ枢機卿に宛てた献辞と著者による序文が存在
する。そのなかで、ブルエスは自らの考えを提示している。多くの人たち
は、全ての知識が1つの臆見にしか過ぎず、確かな知識などなく、学問は
無意味なものであると認識している。しかしブルエスによると、それらの

多くの人たちは大抵その意見を検討せず単なる1つの「臆見」で片づけている。我々は何も知らないままこの世に生まれてくるが、あらゆる事柄についての知識を獲得できるという希望をなくしてはいけないということを読者に訴えている¹⁶⁾。著者の懐疑主義に対する考えが浮彫にされている箇所である。しかし、ブルエスが具体的に考えている懐疑主義とは一体どういうものなのか？

2. ブルエスの考える懐疑主義思想

ルネサンスにおける懐疑主義の考え方は、真新しいものではない。中世の時代も、特に聖アウグスティヌスの書き物を通して、学者たちはこのような考え方をすでに体験している。この著者の態度は、科学的好奇心への警戒や理性に対する疑いに端を発している。しかし、それに加えて多くの要因が、16世紀懐疑主義の発展に貢献することとなる。それは、宗教の激変、その1つの側面はスコラ神学の全ての教義を問題にすること、もう1点は古代「ピロニスム」、つまりディオゲネス・ラエルティオスやセクストス・エンペイリコスの緻密な探求。そして最後に、数学と自然哲学が発展するなか伝統的な知の欠陥が露呈する時期でもある。

ブルエスの懐疑主義は、エンペイリコスのような古代ギリシャの懐疑主義に従っているものではない¹⁷⁾。『新アカデミー会員に反駁する対話』の第1部で、哲学的論拠は主に道徳的、つまり人間は本性をもって行動すべきであり、人間が定めた道徳基準に基づいて行動すべきではないとバイフは主張する。それに対しロンサルは、人間が定めた価値は、理性に基づき、道理にかなったものであると反論している。バイフは、法というものは人間が作り出した不確実な臆見にしか過ぎないものであると述べる。ポブキンの分析によると、ブルエスはバイフの口を借りて、この人間理性論をキケロやディオゲネス・ラエルティオスの考えを援用して否定している¹⁸⁾。

しかし、実際にキケロとは異なり、古代の懐疑的分析に従っているものではなく、あらゆる主題に対し様々な意見を列挙する形をとりながら明示している。

この様々な意見を列挙する形式はブルエス特有の懐疑主義の形ではなく、時代的なものである。しかし、このことについてポプキンに触れていない。例えば、プレイヤッド派の一員であったポンテュス・ド・ティヤールの『宇宙論』（1557）のなかでもブルエスと似たような懐疑的な形式が存在する。この『宇宙論』もブルエスの作品同様対話形式で書かれている。詩人の「隠者」、哲学者の「穿鑿好き」そして聖職者の「イエロニーム」という3人の登場人物で構成され、神学者、詩人、自然哲学者兼天文学者の立場で宇宙に関する議論をする。観測機の発展と共に星の数値データが頻繁に収集され始めた頃でもあり、中世までの惑星や四大元素理論がこれらのデータと一致しなくなり、多くの学者が古い知識に対し疑問を抱くようになる時期である。ティヤールもこの懐疑主義の考え方に賛同している一人であるが、彼の出版した書物のなかに懐疑主義という言葉は一切見当たらない。しかし、彼なりに古い知識への違和感や疑念を以下の4つの方法で読者に提示することで、読者自身が自ら解決する道を探るように促す。1つ目は、様々な意見を列挙し、最後に最も「受け入れられている意見」(opinion recevable)という言葉を使用している。2つ目は、当時疑問となっていた問題点を討論という形で読者に提示している。3つ目は、「不確実」や「疑い」という言葉を用いて、知識の曖昧さを浮彫りにしている。4つ目は、宇宙に関するパラドックスを導入し、そこで何が真実かを読者に考えさせている。この『宇宙論』からわかるように、天文学や自然哲学に関する書物を執筆する者は、「懐疑」的な書き方や考え方で物事を述べようとするにいかなるためらいも持たなかった。ブルエスの場合、題名が『新アカデミー会員に反駁する対話』といったような懐疑主義を匂わせる書物となっていたことで

ある。

それでは、様々な懐疑主義的書物のなかで、ブルエスの書物の独創性はどこにあったのであろうか。

Ⅲ. ブルエスによる学問史

第1の対話は上記で述べたように、主に道徳的規準をどこに定めるかが話の中心となっているが、後半の部分では、まるでヴィヴェスの学問論を想起させるような一般的な学問の問題に会話がかわっていく。医学、弁証学、幾何学、算術、天文学などが挙げられている。これらの学芸に関するブルエスの研究は今日までまったく見当たらない。確かに、内容自体が学問に関することを細かく述べているものではなく、読んでいても気にとまる箇所はない。しかし注意深く読み直すと、大変興味深い側面が浮かび上がってくる。この側面を浮彫にするために、弁証学、幾何学、天文学に焦点を当ててみることにする。

ブルエスによる弁証学とは、理性を用いる技である。この学問は一般的な法則を我々に提示し、そしてあまりにも自然に導き出される法則であるため、それを習わず自然に使っている学者がいることを述べている。要するに、弁証学は日常での経験や必要に駆られて得た知識を理解するために存在するのである。

しかし、弁証学の説明のなかで一般的な法則がどのようなものであったのか、理論的な内容に発展することはない。弁証学を説明した後、主題から脱線し、遠近法や光学の話語り始め、幾何学にまで手を付けている。この光学の部分は長さを見る限り、ブルエスが力を入れた箇所であるように思われる。

登場人物のバイフは、アリストテレス、ユークリッド、プラトン、オッカム、デモクリトスなどがどのように視覚という概念を定義していたのか

を列挙する。それに対し、ロンサールは、

遠近法という技はとても役に立ち、そして必要であり、我々はそれを毎日経験している。というのも、遠近法なしでは、隆起しているものであると我々は考えても、それは平らな絵画にしか思えないし、そして幾度も、なんらかのくぼみあるいはなんらかの突起部分があっても、そうではなくなる¹⁹⁾。

そしてアリストテレスの視覚理論を取り上げ、意見を述べる。

私が思うには、視覚とは空気を明るくする光を通して眼の奥で〔機能し〕、そのあと、空気は本来輝く機能が備わり、様々な色を見ることが出来る眼を動かすのである²⁰⁾。

さらに、それに続いてニコが光の定義を始める。

光は我々の眼には、なんらかの幻影あるいは形象を〔脳裏に〕刻み、そしてもたらす。というのも、もしなんらかの明るい光を見たあと、その光よりも明るくない場所をみた時、我々にはその場所は暗いものであるように思える。最も明るい光の幻影あるいは残存が、まだわれわれの眼に留まるのであるからだ²¹⁾。

ここで、各人物の役割分担を窺うことができる。パイフはまず、様々な可能な意見を列挙するのに対して、ロンサールは妥当だと思う1つの定義「私が思うには」を提案する。ロンサールに加えてさらに、補足情報である光の理論をニコが定義する。

この遠近法および光学の部分は、当時してみれば興味深い箇所であったはずである。というのも、技術の発展という観点から遠近法や光学の主題を取り上げることは、読者を意識した斬新なものとなっていたからである。しかし、これらの理論は旧来からの伝統のなかに根付いたものであった。14世紀から15世紀にかけてイタリア人画家が透視法理論を打ち立て、光学の研究は主に「気象学」のなかの虹の現象の描写と共に現れる。中世で光学について取り上げたアルベルトゥス・マグヌス（1200頃-1280）、ニコル・オレーム（1323頃-1382）、ジャン・ビュリダン（1295頃-1358）などは、アリストテレスの考察²²⁾を再度取り上げ、また西洋において、光学の研究が発展を遂げるのはウイテロ（1230頃-1280以後1314以前）、ロジャー・ベーコン（1214-1294）、ジョン・ペッカム（1240頃-1292）などの研究を介して、さらにイスラム圏の数学者兼天文学者イブン・ハイサム（965-1040）の書物が流布したことであった²³⁾。さらに、光線の道筋が雲を通過する際の屈折を考えたロバート・グロステスト（1170頃-1253）は、光の屈折理論を導入した²⁴⁾。

ブルエスにとってこの光学の箇所を書く際、さらに身近な書物が目の前にあったとされる。それは、ラムスがドイツ人の弟子リスナーとの共同作業で書き上げた、上記で見てきたイブン・ハイサムとウイテロを介しての光学に関する書物である²⁵⁾。この書物は1606年に刊行され、序文に若き天才でラムスの弟子である数学者ジャン・ペナ（1528-1558）も光学の実用性に関する事柄を執筆している。16世紀において、この序文はかなり有名なものとなり、おそらくペナが1556年に王立教授団に任命された際の最初の公開授業で演説されたものであろうと推測されている²⁶⁾。

ブルエスの著作は1557年に刊行され、1606年に刊行されているこのリスナーとラムスが執筆した書物とは無関係に見えるが、実は1568年のラムスの遺言書を確認すると、以下のことが記されている。

最初の3年間、私はフレデリック・リスナーを〔王立教授団の〕教授として定め、そして任命する。この任命は我々二人で一緒に始めた、特に光学と天文学に関する仕事を完成させるためである²⁷⁾。

1568年の遺言書で、すでに「始められた仕事」として「光学」が挙げられている。つまり、1568年以前からリスナーとラムスが温めてきた主題であり、一緒に討論している。1555年頃、ラムスと交流があったブルエスはおそらく、その討論に加わった可能性が高いと思われる。それを証明しているかのように、何か所かブルエスの書物のなかにラムス&リスナーの書物の痕跡が残っている。

対話篇のなかでパイフが次のように述べている。視覚というものは、エンペドクレスやルクレティウス²⁸⁾によると、目に見える軽くて微小なものの揺れ動きによるものであるという文章がある。以下ブルエスの部分をフランス語で記す。

Empedocle et le poète Lucesse, que la vision se fait, par une defluxion des parties ténues et subtiles des choses visibles.²⁹⁾

これをラムス&リスナーの版では下記のように述べている。

Quid vero sit Optica species idem Lucretius e Democriti et Epicuri
Philosophia luculenter exposuit:

Dico igitur rerum effigies, tenuesque figuras

Mittier ab rebus summo de corpore earum

Quae quasi membrana vel cortex nominanda est:

Quod speciem ac formam similem gerit ejus imago

Quojuscunque, cluet de corpore fusa vagary

Atque omnino fluxum talem communem rerum omnium cum
Empedocle putat esse:

Sicuti a ligno fumum, ab igni vaporem, a cicada tuncam, a vitulo
nascente membranam, a serpente pellem.³⁰⁾

このラテン語の箇所は、『光学』の1巻の「目に見えるものは、中心から通る光線を放つ」という第3章の一部を抜粋している箇所である。

この部分を参照すると、ルクレティウス、デモクリトス、エピクロスの哲学が光学の現象を描写していることを指摘した後、ルクレティウスの『ものの本質について』の一節を引用している。そこでは、光学は微小で形成されたものの像が物体の表面から切り離され、それはまるで膜や外皮のようで、あちらこちらで空气中に舞うものとして描かれている。そしてさらにエンペドクレスによると、この空气中に舞っているものはあらゆるものに共通していて、それは例えば火からは煙が出て、セミからは抜け殻が出て、生まれたての子牛からは膜が出て、あるいは蛇からは抜け殻が存在するような現象である。

ここで、ブルエスとラムス&リスナーの版を比較してみると、内容はほぼ同じことを述べているものの、ブルエスは1つの文章でまとめあげているのに対し、ラムス&リスナーの版では、より具体性を強調するためにルクレティウスの詩を導入し、次にエンペドクレスの意見を記述している。

さらにもう1か所、上記ですでに述べたようにロンサールが遠近法の定義のなかで、「遠近法なしでは、隆起しているものであると我々は考えても、それは平らな絵画にしか思えないし、そして幾度も、なんらかのくぼ

み、あるいはなんらかの突起部分があっても、そうではなくなる」という意見を述べる部分である。一見、画家による理論書を読んだかのように思わせているが、実はラムス&リスナーの書物の序文からジャン・ペナによる光学を称賛する箇所をまるでプルエスは抜き取ってきているかのようである。ジャン・ペナを通して光学のすごさを以下のように描写している。

どのような学芸がこのような驚異で、幻惑するような現象の理由を示しているのだろうか。それらの驚異や現象において、人間の精神は、はっきりと見えないように生まれてきている。どのような学問が、このような奇跡の原因になっているのであろうか。小さな塊は、しばしば巨大な大きい物のように見え、曲線は直線に、直線は曲線に見える。四角い物は丸いように、平面図は立体的な物体のように、立体的な物は平面的な図に見える。膨らんでいる物はえぐられている物のように、凸の形は凹の形に見えるのである……³¹⁾。

ここでは、光学という学芸が奇異な現象を生み出す特別な学問であることを強調している。この部分をプルエスは自らアレンジし、特別な存在の学問としてではなく、逆に光学という学芸は実用的、さらに日常的な事柄と密接に関わっていることを示すためにジャン・ペナの一節を用いている。

最後の箇所で光学から離れて天文学を語る際、バイフはコペルニクスの理論を意識したかのように地球中心説を否定している。バイフによると、地球は時には不動でなければならないし、時には動きがなくてはならないのである。プラトン、アリストテレス、プトレマイオスによると地球は世界の中心であるが、

このことに関して、光学学者にとっては不可能に思われる。というの

も、各恒星は他の恒星と等しく同じような動きをしているからである。我々にとってこの動きは、時には速くなったり、時には鈍くなったりしているように見える。このことは、地球に多かれ少なかれ星々が近づいている証である。その結果、地球は世界の中心にあるということは不可能である³²⁾。

この簡潔な説明は、コペルニクス理論の有名な箇所である。地球の歳差により、天球上における分点の位置が移動することで、地球は恒星に近づいたり、離れたりしている。このことについて、我々には恒星の動きが速くなったり、遅くなったり見えるが、実際は、恒星の動きは一定であるため地球には動きがあり、宇宙の構成によれば地球が中心にあることは不可能になってしまう。

ここで、驚くべきことは、パイフの口から「光学学者」の説を出したことである。16世紀フランスにおいて地動説を語る際、ほとんどの場合、「コペルニクスによれば」(selon Copernic) というように固有名詞を出して地動説を指すのが一般的であった。しかし、ここでは、「光学学者」によればというように、地動説を通して光学が学問の1つであることを暗示していることは珍しいことである。実際、ブルエス自身が真新しいことを述べているのではなく、ジャン・ベナに影響されたと思われる。再度ジャン・ベナの序文を確認すると、恒星（特に太陽、そして水星、金星の周転円）の動きの問題に焦点を当て、そこから地球の動きを推測している箇所が存在する。太陽と金星と水星は天球上で、1年かけて同じ点に戻ってくることを示し、それは天球上に1つの軌道が存在し、それらの恒星が描いていることを証明している。ここから、ベナは2つの可能性を提示する。

1つ目は、これらの星々は宇宙の中心に位置する地球を周っているが、金星と水星の周転円に関しては太陽を中心に動いている。ジャン・ベナの

研究者でもあるフェルナン・アラン（1945-現在）によれば³³⁾、これはのちのティコ・ブラエが提案する太陽と地球の2つを中心とする宇宙理論の始まりを感じさせるものである。

2つ目に関しては以下のようなことが記されている。

（多くの偉大なる精神に、そしてそれらの精神の光学がその可能性を教えていると思われたことであるが）地球は一つの星で、宇宙の中心で不動の太陽を周り、黄道帯の周りを一年で一周する。そして水星と金星の周転円は同じ中心を保持する……³⁴⁾。

これはまさしく、太陽中心説、コペルニクス理論に近いものである。その後、コペルニクスが地球に3つの動きを与えたが、ジャン・ペナはこれらの動きを否定している。そして最終的に地球は、

ある場所から他の場所にある一定の動きで進み、そしてそれが、むしろ遅い動きで進行していく。このような不規則な動きは400年に一度しか見ることができないのである³⁵⁾。

これはまさしく、分点歳差の現象を描いている。このような現象の分析を可能にしているのは、

天文学が光学に一致しているからである……。そして光学が天文学に結び付いているからである³⁶⁾。

つまり、ジャン・ペナは光学という学問がなければ、天文学も存在しないし、天文学という学問がなければ光学も存在しないとはっきりと言い切

っている。当時してみれば、この関連性は重要な事柄である。というのも光学は、上記で見てきたように伝統的に気象学のなかで「虹」の現象を語る際に用いられていたからである。この伝統的な学芸が発展を遂げ、画家が絵画を描く際に使う光の研究やここで述べたような天文学においては、惑星間の距離を測る際、光学を用いていたからである。ジャン・ベナの時代では数学者や天文学者の間で光学という学問は知られていたが、哲学者の間では、まだ古代や中世の知識に頼る人たちが多かった。このようにブルエスが書いた地動説を語るパイフの台詞内容から、何故「光学学者」を強調したかったのかが理解できるし、このジャン・ベナの最も重要な考え方である天文学と光学との結びつきを反映したかのような書き方であった。

上記で見てきた3か所だけでは何も結論へと導くことはできないが、これらの箇所から推測できることが2点ある。まず1つ目は、パノスの研究もグリーンウッドの研究も、ラムスのサークルの影響を語らず、登場人物であるプレイヤッド派の視点から分析をしていることで、偏った分析になっていることに気づくのである。これらの箇所の興味深いところはプレイヤッド派の詩人たちの裏には、ラムスやリスナーやジャン・ベナの存在があることである。このように懐疑主義者ブルエスよりも分析の角度を変えて教育者ブルエスを見ていくと、新たな側面が浮かび上がる。ブルエスは古い知識を導入しつつも、技術が発展して得られる真新しい知識も提示しているということが興味深い点である。2つ目は、ある疑問にたどり着く。それは、なぜ数学者や天文学者の理論書が出版されているにもかかわらず、ブルエスのような理論書でもなく、知識だけが簡潔にまとめられたような書物が大手出版社の目に入ったのだろうか。

IV. 理論書から啓蒙書へ：出版社ギヨーム・キャヴェラ

ブルエスの書物は、21世紀人が分類するのであれば、一種の啓蒙書であ

る。何故このような啓蒙書に大手出版社は興味を抱いたのか。そこには、ギヨーム・キャヴェラ³⁷⁾の狙いがあったのである。

1547年、ギヨーム・キャヴェラはカンブレ学寮の前に、シンボルマーク「プール・グラス」(poule grasse 肥満の雌鶏)で本屋兼出版社を開店する。彼は、妻の最初の旦那のギヨーム・リシャルの後を継いだ。この本屋の特徴は主に2つある。1つ目は、当時としては、珍しく専門書を扱う店であった。普通の出版社は、哲学書・法律書や聖書など様々な分野での書物を扱い、売り上げを伸ばしていたのに対し、キャヴェラが扱う書物はほとんどが数学書・天文学書に限っていた。2つ目は、当時の出版事情では考えられないことであったが、事前に1年間出版する書物のカタログを作成していた点である。

さらに、キャヴェラの本屋に置いてある科学的書物は2種類に分類できる。1つは、図や挿絵が入り、内容は完全な形で提供される学者向けの書物である。たとえば、プトレマイオスの『アルmagest』、レギオモンタヌスの『プトレマイオスの天文学大全の抜粋』やユークリッドの『原論』が印刷される。もう一方は、前記のものを簡略化した学生向けの書物である。1つ目の種類の書物は決して再版を知ることがない。というのも、数学書や天文学書は専門書であるため、一度しか使えない図や挿絵が多く、それらを板刻しなくてはならないことで、コストがかかっていたためである。書物の価格が高い分、受容が少なくなる。したがって、キャヴェラが頼りにしていた客層は、後者の書物を買ってくれる人たちであった。つまりそれは学生であり、大学であり、大学の先生方であった。当時コレージュ・ロワイヤール(のちのコレージュ・ド・フランス)で教鞭をとっていたジャン・マニアンやバシャーズ・デュ・アメルに相談し、数学や天文学の科目のプログラムに合わせて印刷させていた。そのなかの1冊としてブルエスの『新アカデミー会員に反駁する対話』をキャヴェラが注文する。印刷に

関しては、2つの印刷屋セバスチアン・ニヴェル（Sébastien Nivelles）とアンドレ・ヴェッセル（André Wechel）が半分ずつ1冊の書物を担当している³⁸⁾。

V. 結 論

以上のようなことを全て考慮すると、啓蒙書としてのブルエスの書物が少し意味を持ち始める。キャヴェラの客層が学生であったため、難しい内容の理論書を学ぶ前に、おおよそに全ての知識を網羅する「百科全書」的な書物が必要であった。このときに、ブルエスの書物が役に立つのである。理論的なことはほとんど省き、第一段階として、どのような知識が存在しているのかを把握することができる書物となっている。しかし、ブルエスの書物のすごさは、ただ知識を羅列しているだけの「概要本」の役目を果たしているだけではなく、最新の知識も導入しつつ学べる書物となっているところである。

ヴィレヤポキンが述べていたように、懐疑主義者としてのブルエスの研究は後世に名を残したというほどではないが、学問史の側面から研究をしてみると、様々な可能性が現れ、次の17世紀に受け継がれるためのヒントを秘めている書物になっているのかもしれない。

注

- 1) Panos Paul Morphos, *The Dialogue of Guy de Brués-A Critical Edition with a Study in Renaissance Scepticism and Relativism-*, Baltimore, The Johns Hopkins Press, 1953. この書物はブルエスの生涯、家系、プレイヤッド派との関係、作品の分析、構成、ブルエスが使用したと思われた原典研究などが収められている。
- 2) Thomas Greenwood, «Guy de Bruès» dans *Bibliothèque d'Humanisme et Renaissance*, tome 13, n°1 (1951), pp. 70-82. この書物は、『新アカデミー会

員に反駁する対話』以外にブルエスはどのような作品を書いたかあるいは書いたとされているか、プレイヤッド派との交流関係を文学作品を通して証明している。

- 3) Pierre Villey, *Les Sources et l'évolution des «Essais» thèse pour le Doctorat présentée* …, tome II, 1908.
- 4) Richard H. Popkin, *Histoire du scepticisme d'Erasmus à Spinoza*, Paris, Presses universitaires de France, 1995.
- 5) Pierre Villey, *op.cit.*, p. 173.
- 6) «Bruès résume en quelque sorte les malaises et les incertitudes qu'on sent autour de soi et que les *Académiques* de Cicéron l'aident à démêler», *Ibid.*, p. 173.
- 7) Richard H. Popkin, *op.cit.*, p. 70.
- 8) La Croix du Maine, François Grudé, *Premier volume de la Bibliothèque du sieur de la Croix du Maine, qui est un catalogue général de toutes sortes d'auteurs qui ont écrit en français*, Paris, Abel l'Angelier, 1584, p. 132.
- 9) ブルゴーニュ出身の貴族で、ヌーヴェル公爵の彼が見た出来事を記した控えを土台に、アンリ2世の軍事行動に関する書物を世に残している。Thomas Greenwood, *op.cit.*, p. 72.
- 10) «Nostre cher et bien aimé Guy de Bruès gentilhomme du païs de Languedoc, nous a faict dire et reomonstrer qu'il a employé la plus part de son jeune age à l'estude de la Philosophie couplant icelle à la Jurisprudence dont il fait principale profession pour plus l'illustrer et rendre parfaite», Guy de Bruès, *Les Dialogues de Guy de Bruès contre les nouveaux académiciens*, Paris, Guillaume Cavellat, 1557, p. 307.
- 11) *Ibid.*, f.e1 v°.
- 12) グリーンウッドによると、1557年以前にはすでに、様々な仕事をしていた人であることを指摘している。Thomas Greenwood, *op.cit.*, pp. 70-74.
- 13) パノスの研究によると、プレイヤッド派のリーダー的存在でもあるロンサールは、再版ごとに、自らの詩に収めた献辞の宛名を替える習性があり、一時的にそれらの宛名のなかにブルエスが現れていることを示している。例えば、ロンサールの詩である、「*Quel train de vie est-il bon que je suive* (1553)」では、マルク・アントワース・ミュレ (1526-1585) に宛てたものであったが、次の1554年版では、この同じ詩がブルエスに宛てられ、1560年版には再度ミュレの名前に替わっている。さらに、直接ブルエスの名前が詩のなかんでてくる「*Veus-tu sçavoir, Brués, en quel estat je suis*」 「私の心の状態を知りた

いかい、ブルエスよ」(*Continuation des Amours* 1555, sonnet L) というソネがあり、親しみ感漂う詩となっている。パイフとの関係も作品を通してのみ知られている。「*Pourquoy à tout propos, Brués, me viens-tu dire*」[ブルエスよ、なぜあらゆる事柄について私に言いにくるのか] (*Quatre livres de l'amour de Francine*, André Wechel, 1555 (Livre II)) などロンサールと似た口調で親密さを表している。しかし、作品のみを通しての解釈にしか過ぎず、現実を必ずしも反映するものとは限らないが、ブルエスとプレイヤッド派との関係があったことが推測されている。

- 14) Panos Paul Morphos, *op.cit.*, p. 15.
- 15) *Ibid.*, p. 15.
- 16) «Qu'il ne faut desperer de parvenir à la cognoissance des choses, combien que nous ne sçachions rien quand nous venons en ce monde», Guy de Bruès, *op.cit.*, f.e v^o.
- 17) 具体的に、セクストス・エンペイリコスの作品『ピュロン主義哲学の概要』のギリシャ語による写本は、15世紀ごろにイタリアに出回り、徐々にヨーロッパに浸透し始める。フランスにおいては、大手印刷屋のアンリ・エティエンスが1562年にこの書物のラテン語版を刊行する。Richard H. Popkin, *op.cit.*, p. 53.
- 18) *Ibid.*, p. 67.
- 19) «…l'art de la perspective ne soit tresutil et necessaire, et nous l'experimentons tous les jours: car sans icelle nous penserions une chose estre relevee en bosse, qui neanmoins n'est sinon une peinture platte, et maintefois, qu'il y auroit quelque enfonsure, ou bien quelque eminence, combien qu'il ne soit pas ainsi». Guy de Bruès, *op.cit.*, p. 89.
- 20) «La vision, selon mon avis, se fait dans l'œil, par le moien de la lueur, qui rend l'air lucide, lequel après esmeut les yeux qui de leur nature sont lucides aussi, et peuvent appercevoir les especes des couleurs». *Ibid.*, p. 89.
- 21) «La lueur aussi apporte et imprime quelques especes ou simulacres à noz yeux: car si après avoir regardé quelque grande lueur, nous regardons une moindre, il nous semblera que le lieu sera obscur, parce que les simulacres ou vestiges de la grande lueur demeurent encore en noz yeux». *Ibid.*, pp. 89-90.
- 22) Joëlle Ducos, *La météorologie en français au Moyen Age (XIII^e-XIV^e siècles)*, Paris, Honoré Champion, 1998, p. 102.
- 23) Voir notamment David Charles Lindberg, «The Optical Synthesis of the Thirteenth Century», *Theories of vision from Al-Kindi to Kepler*, London,

- University of Chicago Press, 1976, pp. 116–121. Voir également Carl B. Boyer, *The Rainbow: from Myth to Mathematics*, New York, Thomas Yoseloff, 1959.
- 24) Michel Blay, *Les figures de l'arc-en-ciel*, Paris, Belin, 2005.
- 25) F. Reisner, *Opticae libri quatuor ex voto Petri Rami novissimo per Fredericum Risnerum ejusdem*, ..., Paris, Cassel, 1606.
- 26) Jean Pena, *Euclidis Optica & Catoptrica, nunquam antehac graece edita. Eadem latine reddita*..., Paris, Wechel, 1557. Traduction d'A. de Rojas, dans *Le Cosmos. Revue des Sciences et de leurs Applications*, vol.XLI (1899), p. 312.
- 27) Charles Waddington, *Ramus sa vie, ses écrits et ses opinions*, Paris, Librairie de Ch. Meyrueis, 1855, p. 326.
- 28) 16世紀フランスにおいては、実例として、この二人の詩人は常に一緒に出されていた。フェルナン・アランによると、この二人の詩人を取り上げることは、16世紀フランスにおける、ルクレティウスへの関心の深まりとともに、この詩人とエンペドクレスとの同化の傾向を意味していた。この同化によってルクレティウスは、より一層自然を描く詩人として現れることとなる。Theresa Chevrolet, *L'idée de Fable, Théories de la fiction poétique à la Renaissance*, Genève, Droz, 2007, pp. 404-405.
- 29) Guy de Bruès, *op.cit.*, p. 88.
- 30) F. Reisner, *op.cit.*, pp. 4-5.
- 31) «Quae enim ars tot praestigiarum, tot fallaciarum, in quibus humana mens per se caecutire nata est, rationes monstrat? Quae scientia tot miraculorum causas aperit? Parva moles ingentis magnitudinis saepe apparet, curva rectis, recto curvis, quadrata rotundis, plana solidis, et solida planis similia cernuntur ...», このラテン語の箇所を訳す際に以下の論文も参照。Fernand Hallyn, «Jean Pena et l'éloge de l'optique» *Autour de Ramus, texte, théorie, commentaire*, études réunies par Kees Meerhoff et Jean-Claude Moisan, Nuit Blanche éditeur, Saint Lambert, 1997, p. 221.
- 32) «... combien que cela semble du tout impossible aux Optiques, parce qu'un chacune estoille fixe a le mouvement semblable, et egal à l'autre: et semble que ce mouvement soit plus vite, et quelquefois plus pesant, à raison dequoy les estoilles approchent plus ou moins de la terre, dont il est impossible que la terre soit le centre du monde». Guy de Bruès, *op.cit.*, p. 92.
- 33) Fernand Hallyn, «Jean Pena et l'éloge de l'optique», *op.cit.*, p. 223.
- 34) «sive (quod multis et magnis ingeniis visum est, Optice fieri posse docet) Tellus unum sydus est, annuo spatio signiferum lustrans circa solem in medio

mundi quiescentem, Mercurii tamen et Veneris iidem epicycli solem pro centro habebunt», Jena Pena, *Joannis Penae Regii Mathematici, De Usu optices praefatio*, f.b1 v°.

- 35) «asserō Tellurem aliquo modo progredi a loco in locum: idque progressu temporis valde lento, cum vix annis quadringentis aurpiuribus, ejuimodi ulla motuum inaequalitas percipi possit», *ibid.*, f.b2 r°.
- 36) «atque ita constabit ex opticis … , si quis eam [opticam] Astronomiae conjungat.», *ibid.*, f.b1 v°.
- 37) 本屋兼出版社ギヨーム・キャヴェラに関する研究は, Isabelle Pantin, «Les problèmes de l'édition des livres scientifiques: l'exemple de Guillaume Cavellat» dans *Le livre dans l'Europe de la Renaissance Actes du XVIII^e colloque international d'Etudes humanistes de Tours*, dir. P. Aquilon et H.-J. Martin, Paris, Promodis-Cercle de la librairie, 1988, pp. 240-252を参照。
- 38) 様々な研究者の表記が曖昧で, 同じ1557年に『新アカデミー会員に反駁する対話』が3冊別の出版社から同時に上梓されているように見えるが, これは違う。実は同じ版であるが, ニヴェル社だけを, あるいはヴェッシエル社だけを, あるいはキャヴェラ社だけを記入する者がある。一番参考となる, しっかりとした表記はトゥールにあるルネサンス研究所の電子化された『新アカデミー会員に反駁する対話』(1557)の解説である。

